

## 詩とエッセイ：：懐かしい風景（2）

とよださなえさんの「追憶のカイロ」は2022年11月号のホームページで、第13回の掲載をもって最期となりました。しかし、まだ掲載されていない詩が彼女の手もとに残っています。その詩がここに戻ってきました。

今回はカイロの風景だけでなく、日常生活の中で心に触れた思いを綴った詩と、その後にかかれたエッセイがセットになったもので、時間の経過の中で見えてくる繊細な風景を温かい心で読み込んでいます。作品が綴られた日時は前後していますが、通してお読みになってみてください。今回からしばらく連載をいたします。誰でもが感じる日常の事柄を美しい優しい言葉に纏めて表現しています。忙しい毎日の暮らしの中で何気ない言葉に心が揺す振られます。(塩尻和子)

とよださなえ

### 記憶

私がふとんの中に横になると  
ふるえる手の上の  
じしゃくの針のように  
ぐらぐらゆれる

### 瞬間

私のこめかみにふれた  
看護婦の手の触感を覚える  
確かな記憶  
ぞっとするつめたさ

100Vの電気を三秒間頭に通す丈で  
簡単に私は何回も気絶した  
そして  
自分を管理出来ないまま  
記憶を失っていった

気絶することは  
自分が生きているのを  
知らないこと  
妙な状態から目を覚ました時  
檻のある同じ部屋に

うめき のたうちまわっている女と  
小さな電気の箱を見た

それから 私は  
その箱 看護婦の冷たい手を  
嫌悪し 恐れた  
看護婦も とがった鼻をもった医者も  
電気の箱も 檻の部屋も  
すべて悪魔のまわし者で  
私を追いかけてくる

シャボン玉が空に群れ  
線香花火が月見草を輝かし  
頬紅をつけたお人形は膝の上に  
夜中のぶらんこは風をゆすった

私は子守唄を欲しながら  
ジャズを歌い インターナショナルを叫び  
ふるさとの歌に甘え  
恋歌を鼻唄まじりに歌った

父の顔があった 目的のない憂い  
母の顔があった 悲しいほどしっかりして  
姉の顔があった 明るくさぐめいて  
父の顔があった 笑っていた  
母の顔があった やさしいほほずり  
姉の顔があった しきりに憤慨して

寢床の周囲に  
ビラが沢山積んであった  
平和友好祭の代表を送るカンパ  
原水爆禁止のカンパ

記憶をなくすのですよ  
とがった鼻の先生の言ったことは  
本当で 口の中で言ってみなければ  
自分の年にも確信が持てない程  
効果が出てきた

友達がやってきた

沢山の手紙をもって  
沢山の同情をもって  
沢山の俗性をもって

私は冷静だったので  
生徒会のことでも  
勉強の方法でも  
家庭の問題でも  
恋愛のことでも  
親身で話した

字が書けたので  
日記をつけた  
その日会った人の名が記された  
暇が沢山あったので  
その日見た夢を記した  
緑のくじゃくの間が大勢  
フルートを吹いて踊っていた  
水晶の味がなんともいえなかった  
銃殺された私は 心安らかに死んでいった  
そんな日の私は豊かで 元気が良かった  
空を飛んでいて 電線に当たったショック  
目を覚ました私は 一日を不安に過ごした

私は疲労素のかたまりだった  
音楽に疲れ 絵を画くことに疲れ  
友達の話すことに疲れ 本につかれ

私の頭は古道具屋のかつらだった  
けれどもすべてを見てとり  
感じ 分析し 解釈した  
一時的に自分を放棄し  
一方で他人の私の取り扱いのあやまりを  
かしこそうに指摘する  
敵は内在するものであることを知って  
無意識を装いながら  
気付かないふりをして

父の実家の山と川と白鷺のいる  
豊かな田舎に連れていかれた

子供たちが沢山私を取り囲んだ  
カチカチ山もマッチ売りの少女も  
しりきれとんぼだった

山百合の花をかゝえて  
茸をかざし  
蓮の花の池に  
膝までつかりながら  
香りを確かめ  
七つの子に手を引かれて  
藁屋根の家に帰った

それ程居心地の良くない  
お伽の国の私は  
浦島太郎になることを恐れ  
規律を失ったまま  
合わないかつらを頭にのせたまま  
学校に サークルの中に入っていった  
残されたものは  
妙に青白く肥った  
私の体だった